

## と挨拶 院長 佐藤志津子

お盆を過ぎた頃から猛暑が和らぎ、だいぶんしのぎやすくなってきましたね。8月某日書店に行ったら、戦争関係の本がやたら多くて、右傾化？と思ったら「戦後70年」特集でした。だからじゃないのですが、この夏は戦争関係の映画を2本観ました。一作は塚本晋也監督の「野火」。大岡昇平さんの原作はむかし読みましたが、あまり印象に残っていませんでした。それがこの映画では、脳天をガツンとやられました。敵と戦うのではなく、飢えと病、自分と他人の狂気と闘う、というよりも翻弄され続ける敗残兵たち。その悲惨な状態が、ドキュメンタリーのように淡々と描写され、まさに目の前に蘇ってくるようです。今も紛争が続く世界で、多くの人に観てほしい、すごい作品だと思いました。(かなりヘビーですが) 塚本監督は、高校生の時に原作を読んで大きな衝撃を受け、いつか撮りたいと思い続け、資金が集まらず「自撮り」で作ることさえ考え、50代でついに思いを達したのだそうです。主演もご自分でやっています。執念の一本。もう一作は、巨匠 スタンリー キューブリック監督の「フルメタル ジャケット」。(昔の映画ですが、特集でやっていました。) こちらはベトナム戦争に従軍する若い兵士たちの話ですが、普通の若者たちがいっばしの殺人マシン(=戦場の兵士)に「成長」するまでを描いています。どちらも、立ち位置は違いますが強烈な反戦映画。安保を論じる方々はぜひ観てほしいと思いました。私は、今私たちが享受している平和に、つくづく感謝しました。まだまだ少し残暑が続きます。患者さんご家族も、体調を崩さぬようご自愛ください。



## その爪水虫 治るかも!! 齋藤肇先生のワンポイントアドバイス



爪水虫(爪白癬)は白癬菌という真菌が、足や手指から爪にまで広がったものです。爪がぼろぼろと崩れたり、肥厚、変形をきたすことで靴下の脱ぎ履きの支障になる、ほかの部位やまわりの人にもうつる可能性があるため、なるべくなら治したい病気です。ただ、今までの塗り薬は堅い爪の中にまで薬の成分が浸透しなかったため、飲み薬による治療が必要でした。しかし、、、この飲み薬の治療には大きな問題がありました。肝機能障害を引き起こす可能性が高いのです。とくに高齢者では注意が必要です。「(爪)水虫では死なないけれど、(治すための)薬で命を落とすかも」となれば、気軽には治療できませんよね。でもそんな方々にも光が! 昨年9月に画期的な塗り薬が登場しました。「クレナフィン」という液体の塗り薬です。有効成分が今までの塗り薬よりも強力で、しかも爪の中や下にまで浸透し、白癬菌が潜む場所まで届くことで、増殖した白癬菌を死滅させることができます。この薬を毎日爪に塗るだけで、肝臓を心配することなく、飲み薬と同程度に爪水虫を治すことができるようになりました。ただし、爪が完全に生え変わるまで治療を続ける必要があります。一般に手の爪で約半年、足の爪で約1年 がかかりますが、年齢やどの爪かによって爪が伸びる速さが異なるので、根気良く治療を続ける必要があります。

文責：齋藤 肇先生



## M様のお母様の闘病記



一言で言えば、肝っ玉母さん。沖縄で元気な4人の子育てをされてこられました。当時高校2年生のKさんが何度も転ぶようになり、ひきつけを起こすようになったそうです。ある時、合唱部の練習から帰宅しベッドで寝ていたら全身ケイレン、ひきつけを起こし失神してしまいその時から歩行困難となり、近くの大学病院で検査入院をしました。そこにちょうど他県の大学病院の神経内科医が来ていて、その先生からシアリドーシスという聞いたことも無い診断名を受けます。そして家族全員も検査をして、Kさんのご兄妹も同じご病気であることが分かりました。

お母様は、ここにはこの病気に詳しい専門の医師がいないし、東京ならば土地勘があるからと、ガラクトシアリドーシスを研究発表されたという先生の本のコピーを持ってご長男様と一緒に上京。しかし先生はその病院を退職されていて、探して受診するも明日学会で海外に行くので時間がない為 ゆっくり先生ともお話できずに一旦沖縄に戻って、翌年再度上京。そこでKさんは再度受診し検査入院します。その後、Kさんは地元に戻られますが、お母様はその後の生活費の為にお仕事を見つけられ東京に残ってお仕事を続け、次男さんと一緒に生活基盤を作っていくかれます。その後、ご長男さんが同居され、地域病院と大学病院の神経内科にかかるようになり、Kさんも上京し、検査入院をされます。その間に家族で住めるようにと引越。そして次女様も体の動きに違和感を感じられ上京、同じ病院にかかるようになり、5人の生活がスタート。お子様方はそんな闘病中でも、車椅子をご利用されながら手話教室や合唱団にて活動されたり、お仕事をされたり、大学に行かれたりそれぞれの生活を過ごされ、お母様はお子様を一手に引き受けられ生活を 支えて来られました。H20年にお母様は、訪問リハビリを受ける検討をされていた時、訪問してくれる病院があることを行政の担当者からお聞きになり、さくらクリニックの訪問診療と訪問リハビリをスタートされています。

現在は、次女様が近所に住まれその生活のサポートもされてお忙しい毎日を送られていますが、いつでもお電話しても元気なお声でご対応して下さいます。そして介護の工夫として、バスマットで段差の調整、手すりはお本人の見やすいテープを巻いたり、車椅子の手を置くところにタオルを上手に巻いたりする等アイデアを発揮されています。お母様は、がんばれるのはとにかく親であること、どうしてこうなったのかを知りたい気持ちだけでここまで来ましたと笑顔でお話されていました。時には父親のような(力強さという意味ですよ)ご家族にとっても頼もしい存在のお母様です。

文責：浜中

## スタッフ紹介



## 医師 笹栗 弘貴 先生

Q1. 私はこんな人・・・  
本年1月より金曜日にさくらクリニック一員として訪問診療をさせて頂いています。マイペース、ポジティブで、医者っぽくないとよく言われています。

Q2. さくらクリニックで働いてみて・・・  
患者様の生活を直接感じながらの診療はとてもやりがいがあります。

Q3. 趣味  
テニス観戦です。錦織君を応援しています。

